

広報

安達太良



【巻頭言】

「校長先生とは？」

二本松市立二本松南小学校長 太田 孝志

子どもたちにとって、「校長先生」とは、どんな存在なのでしょう。

学校教育法では、校長の職務は「校務をつかさどり、所属職員を監督する」とありますが、子どもたちは、この職務を知る由もありません。

先日、休み時間、職員室に来たある児童から「校長先生は、暇してるんだね。校長室にいて椅子に座っているだけだもんね。」と言われてしまいました。「そうだね。」としか答えられませんでした。確かに、最近、校長室で椅子に座って、パソコンに向かっていることが多くなっていることは否めません。私の姿をよく見ているなとうれしく思う反面、この児童は、どんな気持ちで言ったのだろう、何と答えて欲しかったのだろうと考えてしまいました。

『椅子に座って、何をしているのだろう。』

『先生たちは、僕たちのために、毎日、一生懸命に勉強を教えてくれている。

校長先生は座ってるだけで何もしてくれない。』

『暇にしてるなら、僕たちと一緒に遊んでくれてもいいのに。』

等々。



それと反対に、私は、毎日のように子どもたちや先生方の姿を見て、刺激を受けています。笑顔で元気にあいさつする姿、無邪気に自分をさらけ出して遊ぶ姿、失敗していてもくじけずに前を向いて取り組む姿、自分らしく見栄や格好よさにこだわらずに目標に向かって努力する姿、子どもたちや先生方が励まし合いながら一致団結して目標に向かって取り組む姿、誰に対してもやさしく思いやる姿、今までできなかったことができるようになって喜ぶ姿、子どもが理解できるように最後まで指導している姿など、数え上げたらきりがありません。

そのような姿を見るたびに、私に元気や勇気を与えてくれます。「やらされている姿」「自分本位な姿」ではなく、「自分のため、誰かのために自分の意思で前向きに一生懸命にやっている姿」であるからこそ、私が「自分もがんばらなければ」という元気や勇気を受け取っているのかもしれない。

そして、このような一生懸命な姿、自分らしさを自然に出している姿は、関わっている人からも信頼され、苦悩や困難に出合ったときや思うような結果が出ないときでも、自分自身の意思で成長へとつなげていけるのではないかと思います。

「校長先生は、暇してるんだね。」 この言葉は、まだまだ校長として、一生懸命さが足りないというその児童の評価なのかもしれません。

【一生懸命だと知恵がでる 中途半端だと愚痴がでる いい加減だと言いついでる (武田信玄)】

『もっともっと一生懸命に取り組むこと、そして、愚痴や言いついでるではなく自分なりの知恵を出して、学校経営を行うこと』 その児童は叱咤激励してくれているのではないかと思います。

学校を取り巻く環境の変化が激しい時代ですが、その変化を前向きに捉え、知恵を出して柔軟に対応しながら、未来を担う子どもたちの笑顔が溢れる学校となるようにしなければと改めて思います。子どもたちや先生方に負けないで成長できるように、そして、「子どもたちのため、先生方のために自分の意思で前向きに一生懸命にやっている姿」で、子どもたちや先生方にも勇気や元気を与えられる、そんな校長でありたいと思っています。

笑顔で幸せ、あだたらっ子

二本松市立安達太良小学校 齋藤みちる

安達太良小学校は、多数の岳温泉の地域の方々とともに「ふるさと学習」を核として、教育活動を進めています。地域の方々が常々口にする言葉は「俺たちもやってもらったから」・・・まさに、持続可能な社会、ここにあり。そして、熱い「地域愛」こそが「あだたらっ子」に必要な力だと教育活動の一つ行うたびに強く感じるのです。

今年度は「ふるさと学習」に新たな1ページが加わりました。学校運営協議会で提案された「ニコニコキッズワーク」。子どもたちに岳温泉の職業を体験させたいという目的で、各事業所で職業体験をさせていただきました。地域の皆様の笑顔、子どもたちも笑顔いっぱいの活動となりました。

昨年度から始めた「ようこそ先輩」の活動も、学校運営協議会から生まれた活動です。今年度は地域に残り仕事をしながら音楽活動をしている先輩と一緒に、安達太良小学校のイメージソングを作成しました。全校生から歌詞を募集。5・6年生が言葉に思いを乗せ、先輩が言葉を繋げ作曲。岳温泉の広場で、先輩のギターの生伴奏をバックに、子どもたちの明るく元気な歌声が岳温泉に響きました。地域の方からは「すてきな歌、涙が出た」「また聴かせて」と嬉しい言葉をいただきました。

伝統の安達太良山親子登山、スキー教室、スキー大会もまた、地域とあだたらっ子をつなぐ大事な教育活動、地域の誇りです。安達太良小学校は、今までもこれからも「地域の真ん中」にあり、先輩方の思いが脈々と引き継がれていきます。だからこそ、「地域愛」あふれる子どもを育てることが、安達太良小学校の教育の原点、そして持続可能な社会の実現に必要なことなのだと改めて感じています。



「多様な他者」

二本松市立原瀬小学校 佐藤 睦弘

特集テーマにある「・・・多様な他者と協働しながら 持続可能な社会を創る・・・」とは、なんて難しい事なんだと、改めて感じます。

これを教育界（＝人間社会）にだけに限定すれば、なんとなく実現可能な事柄のように感じますが、近くの〇〇池や△△沼に置き換えて考えたとき、本当に「協働」「持続可能」はできることなのでしょうか。

沼や池で考えた場合の多様な他者は、アメリカザリガニやジャンボタニシやウシガエル等の超強力



な外来種も含まれます。それに対する在来種は、

それはそれは弱い、ホタルやモリアオガエル。ちょっと強そうなところでタガメ、オニヤンマと言ったところでしょうか。



さて、在来種は外来種にどう立ち向かえば協働することができ、池や沼を持続していくことが可能なのでしょう。現実的には共存はほぼ不可能に近く、ルール無用の外来種を根絶することから沼や池の平和は保たれ、環境は持続可能（＝昔の姿を取り戻すことができる）となるのでしょうか。そんな企画の番組を見たこともありますし、〇〇を守る会は口をそろえてこのようなことを言うでしょう。しかし、人間社会においてはそんな過激な事は不可能です。

今までの日本は平和でした。澄んだ水の中で生きてきたホタルのように繊細で、存在するだけで取り上げられ、たくさんの人からちやほやされてきました。ですが、このままでは奴らに根絶やしにされてしまいます。食欲旺盛なブラックバスや、鼻をつくような悪臭のする泥の中でも生きていけるアメリカザリガニにも戦える子ども達を育てていくことを目指す・・・。

今、教育の現場は本当に難しいと感じます。

【 特集テーマ 】

【 特集テーマ 】

ふるさと大平が育んだ二人の芸術家

二本松市立大平小学校 相沢 周

本校出身の彫刻家 橋本高昇（明治28～昭和60）は、今の大平地区（二本松市蓬田）に生まれ、本名は橋本留治。西大平尋常小学校を卒業し、その後上京して、木彫の活動を始める。大正14年第6回帝展に初入選、昭和2年第8回帝展後連年入選をし、鹿や牛を題材とした作品を多く発表した。昭和7年第13回帝展で「雄牛」が初めて特選を受賞。このとき、本人より本校にこの作品の原型を寄贈をしていただいている。



橋本高昇の長男は、二本松市の名誉市民でもある彫刻家、橋本堅太郎（昭和5～令和3）である。本校には、橋本堅太郎氏から昭和61年に寄贈された橋本高昇の「双鹿」の原型（左写真）がある。

橋本堅太郎の主な作品には、明治神宮神楽殿の狛犬、伊勢神宮式年遷宮祭の神馬像、花巻農業高校の宮沢賢治像などがある。数多くの作品の中でも、私たちに馴染みの深い霞ヶ城公園の「二本松少年隊像」は、毎年見学学習で訪れる本校の児童を含め、公園を訪れる多くの人たちにその素晴らしい姿を見せてくれている。

芸術家橋本高昇と橋本堅太郎の親子。この二人の作品に触れるたび、その根底に私たちのふるさと“大平”での原体験が流れ、しっかりと受け継がれていることを感じる。二人の成功は、この原体験の上に築かれた大きな努力と情熱の結晶であろう。現代の“大平”で学ぶ子どもたちも、ふるさとに誇りをもちながら、自らの夢に向かって力強く進んでいってほしいと願う。



「二本松少年隊像」に触れる6年生

パリ五輪2024に思う
～地域で育つ「旭っ子」～

二本松市立旭小学校 堀江 茂樹

昨年2024年、パリオリンピック・パラリンピックが開催されました。世界中のアスリート達の輝く姿を見ながら、子どもたちが大人になる頃には、ますますグローバル化が進み、国際社会で生きる力が必要になると感じました。

かつて日産自動車CEOであったカルロス・ゴーン氏は「グローバル化している人や会社、国というものは、自分たちのルーツに自信を持っている。グローバル化とは、強いアイデンティティと組み合わせることで成り立つ」と語っていました。

子どもたちには、純粋にスポーツを楽しむ応援するほかにも、オリンピック・パラリンピックを通して学んでほしいことがあります。その中の一つが「郷土愛」です。自分達の地域や国を知ること、外国への興味関心も高まり、理解も深まると考えます。ふるさと学習「日山タイム」を通して育んできた探究心や地域への思いは、グローバルに活躍する「旭っ子」へのはじめの一步を踏み出す力となることと信じています。

昨年末、岩代地域の小中学校統合と義務教育学校の新設についての基本方針が報道されました。将来の義務教育学校への統合を見据え、子どもたちのために今、旭小学校でしかできない教育に精一杯取り組んでいくことが必要と考えます。

今後もふるさと学習「日山タイム」を柱とし、地域との絆を大切にしながら子どもたちに豊かな心や生きる力を育てていきたいと考えております。旭っ子の健やかな成長のために、これからも毎日の積み重ねを大切に、家庭・地域と連携しながら努力を続けて参りたいと思います。



歌川広重「陸奥百目木驛八景圖」

【 特集テーマ 】

【 趣味・随想 】

「地域とともに」

本宮市立糠沢小学校 芳賀沼真由美

旧白沢村糠沢地区は自然が多く、人々がとても温かい地域です。祖父母と一緒に生活している児童も多く、地域が学校に対して大変協力的です。

4月に行われる「糠沢地区連合大運動会」は、学校やPTA、交通安全協会、交通安全母の会、婦人会、消防団が協力して運営します。5年生が消防団と一緒に取り組む種目、PTA・消防団・子どもたちで対戦する長縄跳びなど、応援にも熱が入り、大変盛り上がります。テント設営や万国旗の設置、準備係なども協力していただき、大変感謝しています。昨年度の大運動会では、前日からの悪天候でぬかるんだ校庭を、PTAや消防団の皆さんが朝早くから整備してくださり、無事予定どおり実施することができました。

また、総合的な学習の時間には、3年生で糠沢地域、4年生で福祉、5年生で食、6年生で防災について学習します。特に、3年生は地域の方から糠沢の歴史について教えていただいたり、6年生は地域の方と一緒に防災に関する活動をしたりなど、地域の方とふれ合う貴重な学習の場となっています。

年1回行われる「糠沢地域防災訓練」でも、防災に関する体験コーナーが設けられ、子どもたちも参加しています。今年度は6年生の防災学習の成果をポスターにまとめ、掲示しました。地域の防災への意識、取組がすばらしいと思います。

糠沢のすばらしい環境を生かし、今後も保護者や地域と連携し、地域とともにある学校を目指し、子どもたちの笑顔を守っていきたくと考えています。



道行く人のささやき

二本松市立二本松北小学校 児山 秀典

小学生の時の読書は読書感想文が宿題に出た時に読んだ数冊しかない。中一の時に読んだ島崎藤村「破戒」は、部落民というキーワードと都会とかけ離れた自分が生きている田舎の生活の違いへの反発とがどこかかみ合い、自分と新任教師として教壇に立つ主人公を重ねて読んだりした。

大学4年間はテレビを持たずに本を読もうと、灰谷健次郎の本や関わる人の本をくまなく読んだ。「兎の目」「太陽の子(てだのふわあ)」等、本を読んで涙を流したのは初めてだった。自分が4歳の時に発生した「浅間山荘事件」。その衝撃はすさまじく心に残り、近くの学校では学生運動も行われていたので、対峙した警察の記録書や三島由紀夫の本も読んだりし、人間の考え・思想がもつ強大な力の存在や治安を守る警察という組織やその仕組みに興味をもった。

教員になるとなんとなく教育書を毎月買った。読んだと言えるほど読み切っていない。ただクルトマイネルの本だけは熱心に読んだ。教諭時代に読んだと胸を張れるのはこの本ぐらいだ。

管理職になり、ある本に出会った。それが「オリンピックの身代金」。東京の繁栄の土台となっているのは東北人のひたむきさ、真面目さ、辛抱強さであることも背景に描かれ、何度も読み返した。ほとんど処分した本棚に凜として立っている。

そして山崎豊子の「運命の人」。この本は読む人を引きつける。なぜならノンフィクションに近いフィクションだからである。折しも主人公とされる西山太吉さんが亡くなり、ニュースでも取り扱われたので知っている方も多いはず。執筆途中で亡くなった本を読みながら別れを惜しんだ。「半落ち」で有名な横山秀夫の作品は全て読み続けている。人間の弱さと犯罪心理、そしてそれを読み解く捜査手法、そしていつも静かに話が閉じられる構成が好きだ。唯一、別路線なのは有川浩の作品。「植物図鑑」「阪急電車」に描かれる描写には、年甲斐もなく「ときめき」すら覚える。描写で言えば「ザリガニの鳴くところ」は、美しい風景が紛れもなく心に描かれる作品である。私にとっての本は「そっと自分らしさをささやいて教えてくれるたまたま出会った道行く人」・・・かな。

「道行く人・・・またそろそろ来て頂戴」

■ 【 趣味・随想 】

■ 【 趣味・随想 】

岩代おじさん図鑑

二本松市立小浜小学校 石川 勝佳

みなさんは、もうご覧になりましたか？

岩代観光協会が発行している「岩代おじさん図鑑」を……。表紙をめくった「冒険のはじまりの書」には、このように書かれています。

【あなたがいつか岩代地域を冒険するためのガイドブックとして。そして、いつか「あなたがおじさんになるその日」までの人生の道しるべとして】

二本松市地域おこし協力隊のAさんが、岩代（小浜・新殿・旭）地域で、特に魅力的で、個性豊かな20人、プラス伝説のおじさん1人の特徴や魅力・生き方などをまとめた、楽しくて充実した図鑑です。テレビや新聞・SNSなどでも多く紹介されました。ファンクラブ会員も全国各地にまたがり、ファンミーティングやツアーも開催されているそうです。

さらに、岩代おじさん図鑑 実践編①（世界で一人のおじさんに出会う旅……）「ふしぎな地図」も最近発行されました。こちらまた、楽しくてすてきな地図です。岩代地域のさまざまな観光スポットや隠れた魅力などを紹介しています。

興味のある方は、二本松市役所岩代支所内の岩代観光協会へお問い合わせください。地域おこし協力隊のAさんによると、「図鑑は好評なので、増刷した後の残りも少なくなりましたが、お譲りすることも可能です。」とのことでした。

岩代で生まれて長年暮らした私も、この図鑑の中でまだ出会っていない人物がいます。この図鑑と地図を片手に岩代を冒険して、地域のよさを再発見しているところです。今後も地域の「人・もの・こと」に深く関わり、岩代地区の教育に生かしていきたいと考えています。



かしこくたのしい 学級づくりプロジェクト

本宮市立五百川小学校 伊藤 比呂美

私が教頭2年目、児童数約百人の小学校3学期の取組である。実践論文で得た賞金十万円をどう使うか、校長の「子どもに考えさせたらいいべ。」の一言から始まったのが「かしこくたのしい学級づくりプロジェクト」である。全学年、児童一人千円分の予算を学級に配当し、学級でどう使うか考えさせることにした。学級で話し合い、計画書、予算書を作成し、学級代表が校長と教頭にその企画をプレゼンする。目的は「かしこくたのしい学級づくり」であるため、学級のみんなが賢くなることと、楽しくなることの2つの条件を満たさなければ合格できない。一発で合格するはずもなく、何度もプレゼンに挑戦。担任には「教師から教えない。子どもが聞いてきたら答える。」というルールを課した。子どもたちは、自主的にプレゼンの練習をし、何度も挑戦した。合格して代表児童がガッツポーズをしながら教室に戻ると、その教室から校舎中に響きわたる歓声が上がった。

1年生の企画は、まほろんで勾玉づくりと埴輪・土偶のガチャガチャを体験することだった。まほろんに興味のある子が学級で提案すると、みんな「行ってみたい！」となったそうだ。スクールバスに乗って、自分で磨いた勾玉と埴輪のミニチュアをお土産に帰ってきた。驚いたのは、その翌日である。1年生4人が、職員室の教頭先生（私）に報告に来てくれた。勾玉と埴輪のミニチュアを見せながら、はじめに……。次に……。と順序立てて話し、最後には感想を蕩々と述べた。ノー原稿である。企画のプレゼンをしたからこそ自分たちの経験を報告したくなったのだと思う。

興味、折り合い、課題解決、困難、協力、挑戦、達成感、分かち合う喜び、満足感など、これからも子どもたちの感動ある学びを創り出していきたい。



<合掌土偶 ¥300>

魅力あふれる東和地区

二本松市立東和小学校 肥沼 志帆

旧東和町の7校が統合して設立されたのが現在の東和小学校である。針道、太田、木幡、戸沢の4地区があり、それぞれの地域の伝統や特色が色濃く残っている。そのため、各地区のお祭りへの思いも強く、獅子舞や太鼓、山車、五反幡などに地域の誇りがつまっている。

ある地域行事に参加した時に、おいしい手作りジャムに出会った。東和の果物で作られた自然の風味に溢れるジャムだった。すると、そのジャムを作っているのが、地域の保護司であり神社の宮司さんでもある方の奥様ということが分かった。その縁で、何度かお会いするうちに「大豆を学習に取り入れる時は協力しますよ」というお声をいただいた。ちょうど、6年生が地域のよさと自分を見つめる学習ができないか検討していた時であった。地域のよさを見つけ出す中で、まずは、東和地区でさかんな農業を体験してみようという思いが広がり大豆づくりに挑んだ。

また、本校の5年生は、地域の方にご協力いただき米作りの体験をしている。12月には、収穫したもち米をみんなで食べる収穫祭がある。そこで、6年生は、きなこもちとして食べるきなこを提供したいと考えた。1年間育てて一から作った手作りきなこは、本当においしくて、子ども達に新たな気付きがたくさん生まれた学習となった。

地域の中に入り、地域を感じて地域の方の思いにふれると、誰もが地域や子どもの未来を思い描いていることに心が震える。学校も、子どもたちが郷土を愛し、将来に生きて働く力を身に付けられるように願う思いは同じである。地域と学校が手を結ぶことが子どもの成長に必要なことを改めて考えることができた。

東和は、野菜も果物も本当においしい。いつか、東和で育った子どもたちの夢が豊かに実を結ぶことを願わずにいられない。

好きだから上達する 2

本宮市立和田小学校 佐藤 憲博



県北テニス協会HPのサークル紹介の写真である。私が所属する「福島ローンテニスクラブ」はほぼ毎週土曜日、福島市西部勤労者研修センターで練習している。福島市民体育祭や県北テニス協会主催の大会にも積極的に参加して技術と戦術を磨いている。県北のダブルスランキングは、55～60歳では1位だったが、60～65歳では勝ち抜けない試合が続いている。この年齢の出場者は技術が熟成され、老獪なのだ。守りが堅く、チャンス逃さない。テニスの奥深いところである。「負けて覚えるテニスかな」である。相手をリスペクトし、まねしたいところはよく観察し、質問もする。

「なぜ、こちらが打つ場所がわかるのですか？」
⇒「ここか、ここしかない」と答えをいただくが、本当は一瞬の体の向きやラケットの面を見て対応しているはずだ。そういう感覚で見られているんだと思う。そこで今年の心構えは、①攻められたときこそ、一か八かの強打や、逃げのロブを止めること。②ボールを良く引きつけて、かつ、当たる瞬間の形を大切に打つこと、である。

最近30歳台の若手が数名入会した。助言しながら自分の打ち方も見直している。毎日、脚力と体幹を鍛え、体形は写真よりスリムになった。時々エースも狙って、ランキング1位を目指す。